

蠟梅の巻

心の優しさ伝えてくれた蠟梅の花

1 月中旬のある朝方、トイレに起きた私の目に淡い黄色の花が生けられているのが目に入りました。花瓶の中で淡い芳香を漂わせながら静かに花を咲かせ優しい声を投げかけてくれる姿は一目見て蠟梅(ロウバイ)だと分かりました。全くの思いがけない出会いでしたが、コロナ禍のもとようやく 2 年ぶりにオーストラリアから帰省していた長女が、謹慎期間が過ぎるやすぐに群馬県安中市の友人宅を訪れて松井田町にある「ろうばいの郷」に案内していただいた後で、お土産として持ち帰った蠟梅だということが後刻分かりました。長女もこの厳寒の時期に花咲く蠟梅の姿に心癒されたことと思いますが、その枝数本をお土産として持ち帰らせてくれた友人の心の優しさも伝わってくる花姿でした。

梅(ウメ)とは違う蠟梅の素性

蠟梅(ロウバイ)は、花の姿(下左)から見るとその名の通り「梅」ですが、実は、クスノキ目ロウバイ科ロウバイ属に属する中国原産の落葉樹なのです。そのため「唐梅(カラウメ)」、「南京梅(ナンキンウメ)」という呼び方もありましたが、半透明で淡いツヤのある花びらがまるで蠟細工のようであり、かつ陰暦の 12 月にあたる臘月に咲くことにちなんでつけられた漢名の「蠟梅(ラーメイ)」を日本語の音読みした「ロウバイ」が一般名称になったのだそうです。ですから、バラ目バラ科に属している日本古来の「梅(ウメ)」とは遠縁なのですが、1 月の下旬に長女とともに訪れた熱海梅園でも、早咲きの紅梅、白梅と並んで、見事に梅仲間ぶりを見せていました(下右)。



厳冬期の庭を彩る貴重な花木

中国から日本へ渡来したのは 17 世紀初めの江戸時代ごろだそうです。庭木としてあちこちに広く植えられているところを見ると結構日本人受けしているようですね。英名も "Winter sweet" となっています。ほのかな香りがするところが英米人にも受けているのかもしれませんが。開花は 11~1 月で、厳冬期の庭を彩る貴重な花木であり、ウメ、サザンカ、スイセンと共に「雪中四友」に数えられているのだとか。蠟梅の花言葉は「慈しみ」「慈愛心」「優しい心」「ゆかしさ」ですが、この花言葉の由来は、花の少ない冬の時期に、ひっそり黄色い花を咲かせてさりげなく人の心を癒してくれる蠟梅にうってつけのような感じがします。また春に咲く花より先だって咲くことから「先導」「先見」という花言葉もあります。

花言葉は「慈しみ」「慈愛心」「優しい心」「ゆかしさ」

ところで、いまいちメジャーになり切れていない蠟梅のことですから、

さしもの即興俳人の高幡大馬王殿もオンデマンド対応に苦労するかと思っていたのですが、今回は写真(右)入りでリクエストに応じてくれました。コロナウイルス禍のために外国人観光客の来日が途絶え、本業の旅行ガイド業は休業状態になっていますが、別業を得て西新宿のオフィスに通って明るく元気に日々を過ごしている様子が電話から伝わってきました。お仕事の合間に近くの成子天神の境内で紅梅、白梅と並んで蠟梅の姿を愛でている心は、蠟梅の花言葉の「慈しみ」「慈愛心」「優しい心」「ゆかしさ」をそのままのように思えます。



厳しくも優しいコメントを是非

高幡大馬王殿は、先ず蠟梅の香は「まるで蠟細工の花弁が溶けて発生しているイメージ」として上の句を、次いで「蠟細工のような蠟梅、どうしても自然な花には見えません。神様が作ったとしか・・・。」と嘆じながら下の句を詠んでいます。

蠟梅の 香（かおり）花弁の 溶けるごと 高幡大馬王

蠟梅や 造化の神の 蠟細工 高幡大馬王)

その上、今回は「高幡大馬王の奥」名の俳句をご紹介します。高幡大馬王殿の奥方の作品です。認知症を患われて5年前に亡くなった高幡大馬王殿のお義母様と奥方が府中の昭和の森公園に散歩がてら蠟梅を見に行ったときの句だとのこと。いい句でしょ。皆さんからも蠟梅の花言葉の「慈愛心」に満ちた厳しくも優しいコメントを送って、お二人の句道邁進をお支えいただけたらと願っています。

蠟梅の 小径（こみち）手つなぐ 母笑顔 高幡大馬王の奥

小田高のかつての通学エリアの中に

しかし、蠟梅といえはなんと言っても、我らが小田高のかつての通学エリアの中に「日本最大級」の蠟梅の名所があることをお忘れなく。神奈川県足柄上郡松田町寄にある「ロウバイ園」です。地元の中学校の卒業生が 250 本を植えたことから始まり、現在では 20,000 本以上のロウバイが植栽されています。小田高 11 期会が催した(2017.02.02)「知っていそうで知らない小田高エリア巡り Part3」には、遠藤紀忠(3 組)、植田研二・太田充・西川岳男(4 組)、瀬戸章嗣・月村博(6 組)の諸兄と私の 7 名が参加して、地元寄(やどりき)の名士となられている安藤彬兄(8 組)にガイド役とアシシー役をさせていただいて「ロウバイ園」をはじめ、源頼朝、政子ゆかりの寄神社や松美酉の中澤酒造など寄部落の観光ポイントを見て回りました。

「みやまのおくの やどりきの里」へ是非どうぞ

寄は、次ページの写真でご覧の通り、緑豊かな自然環境に恵まれた土地柄です。小田急「松田」駅からバスが通っていますが、車で行っても国道 246 号を小田原から秦野方面に走行した所にある「寄(ヤドリキ)入口」の標識の交差点を左折して一走りしたところにあります。こんな身近なところに我らが小田高の通学エリアの北端があり、そこに 2 万本以上のロウバイが咲き誇る「日本最大級」の蠟梅園(右の写真)があろうとは思ってもみませんでした。

文末に「知っていそうで知らない小田高エリア巡り Part3」リーダーの安藤彬兄のレポートを添えておきます。どうぞ、お誘いあわせの上、「みやまのおくの やどりきの里」に脚をお運びになってみて下さい。





ロウバイ園は耕作放棄地対策や村おこしの一環として、中学生の卒業記念となるよう地域の方々と協力をし植樹が進められ、現在では1万本を数えるまでになっています。来園された日は黄色く可憐な花も満開で、馥郁たる甘い香りを充分楽しんでいただけたものと思います(*2017 年当時)。これからは、3 月下旬～4 月上旬の「寄五大しだれ桜」、5 月 5 日の「若葉まつり」(子供たちのマスのつかみ取りは人気)、6 下旬の「ほたるの夕べ」等があり、また、サッカーや野球のできるグラウンドや人工芝 3 面のテニスコートもあります。

さて、寄地区は、江戸時代には相模の国、萱沼村、弥勒寺村等の 7 ヶ村が有りましたが、明治維新となり合併が進められ、各村の村長が何日も寄り合いを持ち明治 6 年に合併する事となり、旧来から協力し合い寄り合って生きてきた 7 ヶ村をより集め出来た村であることから「寄」をもって村名とされたと伝えられています。明治 26 年 5 月に東海道線松田駅から農民のひく馬の背にゆられながら井上毅(こわし)文部大臣が来村され、村長宅に一泊して寄小学等を視察され、随想集の「梧陰存稿」に村の様子等とともに「我もまた 住まばやとしも思う哉 みやまのおくの寄木の里」と詠まれた歌があります。

交通の便は甚だ辺鄙な所ですが「みやまのおくの やどりきの里」に足をお運びいただければ幸いです。

安藤彬(8 組)